

# 悟りの教科書

荒了寛×苦米地英人

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み



# 1

第

章

誰の心にも「悟り」は秘められている

なぜ苦米地英人は出家者となったのか

苦米地英人 さて、これから荒先生と一緒に『摩訶止観』<sup>＊かしかん</sup>、ことにその『摩訶止観』の中でも最も思想的に重要な「一念三千」について語っていきたいと思うのですが、その前に、私と荒先生との関係を読者にご紹介しなければなりませんね。

荒了寛 苦米地<sup>とまべち</sup>くんと出逢ったのは……あれは今から十数年前、広島県の福山<sup>ふくやま</sup>通運<sup>つううん</sup>の研修会で一緒になったのが最初でしたか。

苦米地 福山通運と私との縁は、父の時代から始まるんです。父は銀行の仕事の関係で福山通運の社長さんとは先代からお付き合いがあった。その縁もあつて小丸成洋さんこまるしげひろ（福山通運現社長）が社長に就任なさったときに、新人の研修会で講演を頼まれたんです。そこに荒先生も講師として参加なさっていた。まず荒先生が話されて、その後が私だったと思うのですが。

荒 そこで話をしていたら、とにかく仏教に造詣ぞうけいが深いようだし、信仰心も持っているので「だったら、いつそのこと出家しなさい」と提案したら、即座に「お願いします」という返事が返ってきた。

苦米地 しかも私だけでなく、妻や義理の弟まで一緒に出家

してしまった（笑）。

荒 古くから「仏種<sup>ぶつしゆ</sup>は縁によつて起こる」※という言葉があるけれども、まさにあなたの出家も縁だね。私や苦米地くんの意志でそうなったというよりも、そうなるべくしてなった。縁があつたということでしょう。

## カーネギー・メロン大学で学んだ仏教

苦米地 私自身からすれば仏教の思想、釈迦<sup>しゃか</sup>の思想は昔から興味を持っていましたから、いずれはきちんと師についたうえで仏教を学んでみたいと思っていました。

だから荒先生から「出家したらどうかね」と言われ、即座

仏種は縁によつて起こる  
『法華経<sup>ほっけきやう</sup>』方便品にある言葉。  
「悟りを得ようと発心<sup>はつしん</sup>するのは前世から縁があつてのこと、仏様<sup>ほとけ</sup>の導きである」という意味で使われる。

に「お願いします」と答えたのです。

私はカーネギー・メロン大学※の大学院に入って計算言語学、いわゆる人工知能の研究をしましたが、実はこの計算言語学の研究室は工学部や言語学科にあるのではなくて、哲学科にあるんです。

だからカーネギー・メロンに留学したときにはコンピュータだけでなく、哲学や論理学に関するトレーニングも受けた。

その過程で仏教の何たるかも勉強したのですが、しかしやはり深く勉強するには学問であれ、仏教であれ、師に分からないと本当の勉強はできません。やはり机上じじょうの学問、本を読んだだけでは本当に「学んだ」とは言えない。だから、荒先生との出会いに「これだ!」と思ったのです。

カーネギー・メロン大学 ペンシルヴァニア州ピッツバーグにある私立の工科大学。二十世紀初頭、鉄鋼王カーネギーによって創設。マサチューセッツ工科大学、カリフォルニア工科大学と並ぶ名門工科大学で、中でも計算機科学の研究では全米一と言われている。

荒　やはり仏縁というものだろうね。だからあとは一瀉千里  
 で得度式※ということになった。

## 師僧と戒師

苦米地　そこで読者のために説明すれば、私にとって仏道上  
 の師（師僧）は荒先生ですが、出家得度の儀式には出家者が  
 守るべき戒※を授ける「戒師」と呼ばれる僧侶の立ち会いが  
 必要とされます。

そこで荒先生のお導きで、叡南寛範大僧正（現・毘沙門堂門  
 跡※）が戒師を務めてくださった。

しかも、その式場となったのが滋賀院※という、天台宗で  
 は最も格式の高い寺です。普通、私のような一般の人間が得

得度式　得度とは本来、悟り  
 の境地（彼岸）に渡る意味で  
 あるが、そこから転じて仏道  
 修行のために出家をして僧侶  
 になることを指す。

戒　仏教の信者が修行をする  
 際に守るべきルールのこと。

毘沙門堂門跡　毘沙門堂は京  
 都山科区にある天台宗の古  
 刹。創建は奈良時代の七〇三  
 年と言われる。江戸時代以後、  
 皇族や貴族が住職を務める  
 「門跡寺院」になり、以来、  
 毘沙門堂門跡と称されるよう  
 になった。

度式をできるようなお寺ではないですが。何しろ一六一五年に、徳川家康のブレーンだった天海僧正※が建立したといういわれがある。

荒 いい得度式だったね。叡南さんの「叡」と、私の名前をあわせてあなたの法名※は「叡了」※になりました。

苦米地 本当は出家得度のあと、そのまま修行に入り、さらに荒先生の下で仏教を広める仕事をしなければならないのだけれども、仕事の関係で待つていただいています。そこで身代わり……というわけではないですが、一緒に出家した義弟に、荒先生が住職をなさっている天台宗のハワイ別院※で働いてもらっているところです。彼の法名は「叡寛」※です。また私自身も荒先生からハワイ別院の国際部長の役目を仰せつ

滋賀院 滋賀県大津市にある天台宗の寺。天台宗の総本山である比叡山延暦寺の住職である天台座主が住まう本坊とされる。

天海僧正 一五三六〜一六四三。会津（現在の福島県）出身。家康・秀忠・家光と徳川三代の将軍に仕えて、特に家康の知恵袋、懐刀とも言われた。信長に焼かれた比叡山の復興にも心を砕き、天台宗の発展に力を注いだ。

法名 出家したときに与えられる修行者としての名前。

かつて、そちらの仕事はさせていただいています。

## ハワイの灯籠流し

荒 あなたがいるおかげで私も助かっています。寺が忙しいときには会社の人たちを連れて、何度もハワイに手伝いに来てくださった。ことに灯籠流しを手伝ってくれたのはありがたかった。今でも感謝していますよ。

苦米地 あの灯籠流しは本当に素晴らしいイベントでした。毎年八月十五日にワイキキのアラワイ運河で灯籠流しをやっていました。ざっと一マイル、つまり千六百メートルの運河の端から端まで灯籠を浮かべて……それは壮観でしたね。

天台宗ハワイ別院 日本天台宗の海外開教の最初として、ハワイ・ホノルル (23 Jack Lane, Honolulu) に別院が開かれたのが一九七三年十一月のことで、荒了寛は以来、今日まで住職を務めている。

しかも、それが仏教のお寺だけでなく、キリスト教の教会もカトリックもプロテスタントも参加した、宗教や文化の違いを超えた大イベントでした。ホノルル市長やハワイの州知事も参列していました。

荒　ハワイの海軍基地、つまりパールハーバーの司令官も参列して焼香してくださったし、水兵さんたちが鎮魂のラッパを吹いてくれた。またハワイだけではなく、アメリカ本土から参加してくれた人たちも多かった。

苔米地　白人の女性たちが手を合わせて灯籠を見送っていた姿には感動させられましたね。

荒　この灯籠流しはちょうど十五年目の年、運河が工事で使

用でなくなつたので、いったん中断してしまいました。現在には他の宗教団体が主催して続けられています。

私はあまり僧侶としてはたいしたことはしていないと思うけれども、あの灯籠流しに関しては、ハワイにおける仏教の復興のために多少は役に立ったように思っています。今では灯籠流しはハワイの風物詩として定着しましたしね。

苦米地 それは謙遜けんそんというものでしょう。荒先生はそもそもハワイの天台別院をゼロから作られたわけだし、そればかりかニューヨークや西海岸、さらにはオーストラリアにまで別院を作っておられる。

荒 いや、それは私の手柄などではありません。そもそも、ハワイ別院も天台宗全体で取り組んだ事業だし、またいろん

な人の助けがなければできなかったこと。やはり、これも「縁」があつたからこそできたことです。

それにしても、あの灯籠流しでは実にあなたとあなたの会社の人たちに助けられた。わざわざ、そのただけに日本からハワイにやってきてくれて、ろくに観光もしないで灯籠を運んだり、後片付けをしてくれたりして。

苦米地 八月十五日といえはハワイ行きの航空機の手ケットが一番高い時期ですから、酔狂すいきやうと言えは酔狂かもしれないませんね。

それに「ハワイで遊べる」と思っていたのに、まっすぐお寺に行かされて、灯籠流しの手伝いをさせられた社員たちは少々気の毒だったかもしれない。大変な肉体労働ですからね。そういう意味では大変な「研修旅行」だった（笑）。

でも彼らもいざ灯籠流しが始まると感動していましたから、行つた意味はあつたと思います。

荒 灯籠は全部、信者さんたちの手作りですが、一番大きな灯籠は直径が三メートルもあるし、中灯籠、小灯籠も合わせると三千近くあつた。だからそれを運んで、水に浮かべるだけでも大変な作業です。社員の皆さんに本当に感謝していますよ。

## 学問は「人」から学ぶものである

苦米地 私にとって荒先生は師僧なのですから、弟子としてお手伝いをするのは当然のことです。

それに天台宗に入信したというよりは、荒先生の弟子になったという思いのほうがずっと強いです。学問というののはやはり「人」から学ぶものだと思います。どんなにむずかしい本を読んでいても、すぐれた師に出逢う経験にはかなわないというのが私の昔からの信念です。

私がイエール大学※に留学したのもそれはロジャー・シャンク※というすぐれた学者がいたからです。カーネギー・メロン大学に行ったのも同様です。それも正規の学生として留学しました。いくら本場に行っても、客員研究員、つまり「お客さん」のままではダメなんです。

荒 それは得度でも同じことだね。在家出家でもいいから、やはり得度を体験するのとしなのとは構え方が違うと思いますね。

イエール大学 コネチカット州ニューヘイブンに本部を置く名門私立大学。その創立は一七〇一年で、アメリカ建国（一七七六年）よりはるかに早い。歴代大統領や著名な政治家を輩出（はくしゅ）していることでも有名。

ロジャー・シャンク 一九四六〇。一九七〇年代から八〇年代にかけて人工知能や認知心理学の分野で先端的な業績を上げ、「人工知能の父」と言われる。その後、教育分野に活動の中心を移して活躍中。

## 比叡山大講堂に並ぶ木像の秘密

苦米地 たえば私は荒先生を師僧としますが、その荒先生にも師僧がおられ、その師僧の師僧、師僧の師僧の師僧……とたどつていくと、最後には釈迦に行き着く。それが仏教という「法統」<sup>ほうとふ</sup>ということ、その流れの中に自分自身を投じないと何も分からない。そういう思いが私の中にありましたから出家に際してもまったく躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>はなかつた。

しかも、天台宗といえ、日本における仏教の「源流」といつてもけつして大袈裟<sup>おおげさ</sup>ではない。日本にはたくさんの仏教の宗派があるわけですが、天台宗はいわば別格なのです。天台宗の荒先生を師僧とすることは、日本の仏教すべてにつな

がることでもあり、さらにそれは中国の仏教につながり、釈迦にまでまつすぐつながっていく。

こうした天台宗の地位を端的に示しているのが比叡山の大講堂※です。

講堂とは僧侶が学問研究をするためにあるものですが、この比叡山の大講堂を見学して誰もが驚くのが、日蓮上人、道元禪師、栄西禪師、法然上人、親鸞上人といった日本の仏教各宗の祖師となった人たちの木像がずらりと並んでいることです。

なぜ、天台宗の本山の、それも講堂にこれらの人の木像があるかといえば、この人たちはみな元をただせば天台宗で仏教を学んだ人たちなのです。

荒 今の時代の言葉で説明すると、日本仏教界における比叡

大講堂 比叡山における学問研究の道場であり、また四年に一度行なわれる「法華大会」の場でもある。

山とは一種の総合大学のような存在なのです。

もともと天台宗とは、中国で生まれた仏教の宗派です。中国天台宗を開いたのは六世紀の智顗ちぎという高僧ですが、それから紀元九世紀初頭に唐に渡った伝教大師でんぎょうだいし・最澄さいしやうによつて、日本にその法灯がもたらされ、日本天台宗が開かれた。

このとき、最澄は中国で天台宗（円教えんぎょうとも）を学んできたばかりか、菩薩戒ぼさつかい、牛頭禪ごうぜん、さらには密教をも持ち帰ります。

これらをまとめて「円・戒・禪・密」とも呼びます。菩薩戒というのは出家者の守るべき戒律であり、牛頭禪とは中国で生まれた禪の一派で、最澄の開いた日本の天台宗とは要するに当時の中国仏教をトータルで持ち帰ったようなものです。

## 鎌倉新仏教はすべて比叡山から生まれた

苦米地 その円教、つまり中国から持ち帰ってきた本来の天台宗は別名「天台法華宗」というとおり、『法華經』を根本經典とします。

荒 『法華經』というと、鎌倉時代、法華信仰を広めた日蓮が有名ですが、日蓮はもともと、千葉の漁師の子として生まれ、同地にあった天台宗の寺院で出家をし、その後、比叡山で修行をしています。

苦米地 その意味では日蓮上人はやはり天台宗の「法統」に

連なる人なんですな。

しかし、比叡山で修行したのは日蓮だけではありません。「鎌倉新仏教」と呼ばれる諸宗を作った僧侶はみな例外なく天台宗の僧であり、比叡山で修行をし、学んだ人たちだった。

だから、その人たちの木像が比叡山の大講堂に並んでいても、少しも不思議ではない。天台宗から見れば、彼らはすぐれた「卒業生」であるというわけなのです。

荒 天台宗の場合、最澄の弟子であった円仁えんにんが唐に渡って、そこで念仏を学んで日本に持ち帰ってきました。ここからいわゆる「比叡山浄土教」しよとどきやうが生まれます。

苦米地 浄土宗を創始した法然、浄土真宗を作った親鸞、と

もに天台宗の出身です。

## 密教の修行とは「仮想体験」をするためのもの

荒 日本のお台宗は、当時の中国仏教の諸派をすべて吸収しています。だから、念仏も禅もそして密教もある。比叡山は最先端の仏教を学べるところだったと言っても過言ではないのです。

苦米地 いわゆる頭教<sup>けんぎょう</sup>※だけでなく、密教もあるということころが重要です。

密教というのは護摩<sup>ごま</sup>※を焚いたり、あるいは過酷な修行をしたりすることによつて、さまざまな幻覚を体験させるので

頭教 「明らかに説かれた教え」という意味で、釈尊<sup>しやくそん</sup>が言葉によつて弟子たちに解き示した教えのことを言う。この頭教<sup>けんぎょう</sup>と対になるのが密教であり、密教では秘儀や呪文によつて真理と一体化することを目指す。

護摩 護摩壇<sup>ごまだん</sup>に火を熾<sup>も</sup>して不動明王<sup>ぶどうめいおう</sup>などを招き、細長く切った薪<sup>たきぎ</sup>(護摩木)やさまざまな供物、香油を注いで種々の祈願を行なう儀式のこと。

すが、そうした体験と仏教の悟りがどうつながるかといえ  
ば、そういう幻想を見せることによつて「お前の感じている  
苦しみも悩みもすべて心が作り出したものだ」ということを  
体感させるわけです。密教の修行が経験させる幻想はものす  
ごくリアルティに満ちたものですから、世の中の現実とはし  
よせん心が産み出した幻<sup>まぼこ</sup>にすぎないということを実感できる  
のです。

## 「遮那業」と「止観業」の両方を学ぶのはなぜか

荒 天台宗では密教にあたるものを「遮<sup>しや</sup>那<sup>な</sup>業<sup>ごう</sup>」と言います  
が、比叡山では「遮那業」と同時に「止<sup>し</sup>観<sup>かん</sup>業<sup>ごう</sup>」、つまり禅も  
教える。神秘体験だけで終わらせるのではなく、一方できち

んと自分自身を見詰めなさいというわけです。天台宗では昔から仏教を研究する「学生」※には「遮那業」と「止観業」の二つのコースを学ばせていた。それは今も同じです。

苦米地 これに対して空海※が開いた真言宗は密教を頂点に据え、その下にすべてを包含することを悟りの方法論としています。天台宗の最澄と真言宗の空海とは、しばしば並べて語られますが、実は教えの内容も形もずいぶん違います。

## なぜ日本人は『法華経』に惹かれるのか

苦米地 先ほどの話の中で、天台宗の最高經典は『法華経』だという話題が出ましたが、今回のテーマである『摩訶止

学生 仏道を学習する僧。学問僧、学侶とも言う。最澄は『山家学生式』を著わし、天台宗で得度・受戒をした僧は一二年間、比叡山で学問・修行させることと定めた（実際の運営は最澄没後のこと）。

空海 天台宗を開いた最澄と同時期に中国（当時の唐）に渡り、師僧・恵果と出会い、密教の奥義を伝授される。帰国後、高野山金剛峯寺を開き、真言宗の開祖となる。俗に「お大師さん」と呼ばれる。

『観』を理解する上で、まずこの『法華經』のことから始めたいと思います。聖書に触れずにキリスト教の話ができないように、天台の『摩訶止観』を語るには『法華經』の知識は不可欠です。

荒 仏教のお経というのはそれこそ数え切れないほどあるわけですが、その中でも『法華經』は日本に最も早く入ってきたお経の一つではないでしょうか。というのも、聖徳太子はお経の解説書として有名な『三經義疏』※を書きますが、その一つが『法華義疏』で、つまり『法華經』の解説を書いておられるわけです。

苦米地 日本人が最初に親しんだお経は『法華經』かもしれないですね。

三經義疏 聖徳太子が記したと伝えられる、『法華經』『勝鬘經』『維摩經』それぞれのお経の注釈書。中でも『法華義疏』は伝承によれば六一五年に書かれた、日本最古の書物と言われる。

荒 それはなぜかと言うと、もちろん第一の理由はいわゆる大乘仏教において『法華経』は最も重要な經典の一つであるからですが、それと同時にやはりこの『法華経』の思想が、その当時の日本人の宗教感覚にいちばんぴたりと合ったからでしょう。

『法華経』は、この聖徳太子のとき以外にも、日本天台宗を開いた最澄が帰朝して比叡山を開いたとき、さらに日蓮上人が法華宗を開いたときと何度も日本史の中に登場しますが、それだけ日本人にとっては親しみ深いお経であると言えます。

苦米地 これはあまり好ましくないほうの例ですが、二十世紀初頭に現われた軍人や国家主義者※たちの多くも『法華経』

軍人や国家主義者 陸軍の石原莞爾、西田税、思想家の北一輝、血盟団の井上日召らが法華経の信者として有名。ちなみに、詩人・宮澤賢治も法華経を熱烈に信じていた。

をあがめていましたね。

荒 そうした人たちが『法華經』に関心を持ったのは、ある意味では当然なのです。というのも、『法華經』が出来たのはお釈迦様が亡くなつて数世紀経つてからのこととされていますが、その当時、『法華經』の教えを批判する人たちが少なくなかった。『法華經』の信者が弾圧を受けることも少なくなかつたのでしょうか。実際、この『法華經』には「この經典を信じる人はいろんな迫害を受けるであろう」という予言が書かれている。

苦米地 聖書の中に出てくる預言者※はつねに世間から迫害されますが、それを思い出しますね。

預言者 しばしば「予言者」と「預言者」は混同されるが、聖書の「預言者」とは、唯一神からのメッセージを託された人のことであり、未来を予告する「予言者」とは質的に異なる存在である。神の怒りと警告を伝える使命を与えられた預言者は、世の中からは敬遠され、排斥はきされる運命にある。

荒 だが、そうした抵抗があればあるほど、信仰心は強くなるのも事実です。だから、「昭和維新」で社会を変革しようとした軍人や国家主義者たちが『法華経』の信者になったのは無理もない話ではあるのです。

## なぜ「大乘仏教」は生まれたのか

苦米地 では、『法華経』のどのような教えが迫害の対象になったかといえ、それまでの仏教のあり方を批判したからですね。

荒 『法華経』が出来る以前の、いわゆる初期仏教では、苦しみを滅めづして悟りを得るためには戒律を厳格に守りながら、

修行をしなくてはいけなかった。つまり出家をしないといけないとされていたわけです。もちろん在家の信者はいたけれども、それでは戒律を守った生活はできませんから、在家では本当の悟りには至らないとされていたのです。

これに対して、『法華經』は「誰の心の中にも悟りに至る可能性がある」、言い換えると「仏性がある」という主張を掲げて登場しました。出家して修行しなくてもいいというわけですから、既存の仏教教団から激しい抵抗を受けたのは当然です。

苦米地 「初期仏教」、そして今日「上座部仏教」※と呼ばれるタイやスリランカの仏教は、釈迦の教えのオリジナルの部分を残しているという意味ではより正統的です。

しかし、その一方でインドの社会に古くからある階級制

上座部仏教 釈迦入滅から約一世紀経つたころ、初期の仏教教団の中で、主として教団長老たちからなる「上座部」と、教団の下部組織と見られる「大衆部」との間に対立が起き、根本分裂に至ったとされる。分裂の原因については諸説ある。

度、いわゆるカースト※の発想が徐々に入ってきて、お坊さんと信者との間に「階級差」が生まれるようになったのです。

たとえばスリランカでは、お坊さんには常人にはない力があると思われる、信者が靈驗れいげんを得るために拝んだりします。

これは私自身がスリランカで実際に見聞けんぶんしたことです、お坊さんがお金持ちの信徒に対して、「あなたたちが出かけている間、私たちが交通安全を祈願しておきました」と言っていたのです。これは宗教家というよりもオカルティストの発言ですね。しかし、こうしたことを普段から言っていないと、一般の信者はなかなかお布施おほせ※をしてくれないのかもしれない。

それはさておき、出家しないと救済は得られないというの

カースト ポルトガル語のカースタ (casta 血統の意) に由来する、インドの社会身分の呼び名。古代インドのバルナ (四種姓) が起源とされる (後述)。

布施 一般的には、出家者や仏教の教団、あるいは貧窮者に対して、財産や衣食を施ほし与えることを言うが、こうした「財施ざいし」の他に、教えを説き与える「法施ほふし」や恐れや悩みを取り除いてやる「無畏施むゐし」も重要な布施とされる (三施)。

はおかしいのではないかという批判が信徒の側からも出たし、僧侶の中からも出てきた。そこから「大乘仏教」と呼ばれる新しい仏教の思想が生まれます。それがだいたい紀元一世紀くらいのことです。釈迦の死からだいたい四〇五世紀くらいあとのことです。

大乘仏教の「大乘」とは大きな乗り物という意味です。つまり、生きとし生けるものすべて（一切衆生）を救えないのでは仏教とは言えない。釈迦は本来、衆生の救済のために仏教を広めたのだから、「出家しないといけない」というのは釈迦の教えではないというのが大乘仏教側の主張です。

この大乘仏教側が従来の仏教に対してつけたのが「小乗」という名称です。つまり「従来の仏教は修行者一人だけが救われる、小さな乗り物だ」というわけです。

荒 「小乗」といった呼び方はさすがに好ましくありません。だから今では歴史的に言う場合には初期仏教と呼び、また現在、タイやスリランカなどで信仰されている仏教のことは上座部仏教と呼びます。

そこで話を戻せば、天台宗の根本經典である『法華經』は「初期大乘經典」の一つに数えられます。『法華經』の成立過程は分かっていないことのほうが多いのですが、大乘仏教が成立し、それが思想として練り上げられていく中で生まれてきたものであったようです。

だから、この『法華經』の中にはその当時の大乘仏教の關係者の危機意識が深く刻み込まれています。この經典を信仰する者は迫害を受けるのだという「予言」はそこから生まれたものであった。

## 釈迦は大乗か、小乗か

苦米地 およそ革新的な思想、ことに社会を大きく変えるだけの力を持った思想は、それが最初に出てきたときには社会から大きな抵抗を受けるものです。

それは大乘仏教のみならず、釈迦の教えも同じです。釈迦の教え、つまり仏教は当時のインドの支配層にとっては「危険思想」以外の何物でもありませんでした。

今、大乘仏教の話が出ましたが、釈迦の教えは大乘的であったか、それとも小乗的であったかと言えば、私は文句なしに大乘的であったと思います。

よく知られているとおり、釈迦はもともと、インドの北に

ある釈迦族の国王の息子※で、ひじょうに恵まれた生活を送っていて、妻も子どももいました。しかし、釈迦はそのような境遇にありながら、なぜ人生は苦に満ちた、不条理なものであるかを若い頃から思い悩んでいて、ついに出家者となつて修行を始めます。

六年間にわたつて、彼は絶食などの激しい修行を続けるのですが、それは彼の心身をいたずらに痛めつけるだけでしかありませんでした。結局、彼は行き倒れ寸前になつてしまい、スジャータという少女が持つてきた乳粥で命を救われます。

このスジャータのお布施で体力を回復させた釈迦は「身体を痛めつけるだけの修行には何の意味もない」と知り、菩提※の下で瞑想を行なうことにしたところ、悟りを得たと言います。

国王の息子 釈迦はインド・ネパール国境沿いの小国カピラバストウ(Kapilavastu)を支配していた浄飯王(Suddhodana)とその妃・摩耶(Māyā)の子として生まれた。しかし、生後七日目に釈迦は母を失い、以後は叔母に育てられることになった。

菩提樹 釈迦がその下で悟り(菩提)を開いたことから、この名が付けられた。

しかし、そこで釈迦はすぐに教えを広めようとはしませんでした。伝説によれば、釈迦は悟りを得た喜びを数日の間、一人で味わっていたと言います。そこに現われたのがインドの神である梵天<sup>ぼんてん</sup>※で、釈迦に「その悟りを人々にぜひ伝えてください」と要請します。

この梵天からの要請（「梵天<sup>ぼんてん</sup>勧請<sup>かんとく</sup>」と言います）に、釈迦は最初のうちは首を縦に振りませんでした。「こんな深遠な真理を普通の人々に理解させるのは容易ではない」と考えたからでしょう。

しかし、三度にわたる梵天勧請にほだされて、釈迦は説法をすることに決めます。そして釈迦が最初に向かったのが、かつての修行仲間たちのいる場所でした。この最初の説法のことを「初転法輪<sup>しよてんぽうりん</sup>」と言います。仏教では釈迦の教えを車輪にたとえて「法輪」と呼びます。悟りの後に初めて法を広め

梵天 バラモン教で「宇宙の根本原理」とされるブラフマン (Brahman) が、時代を経るに従って神格化され、万物の創造者として崇拜されるようになったもの。仏典では帝釈天<sup>たいてん</sup>と並ぶ、天人界（後述）の長とされている。

たので「初転法輪」と呼ぶのです。

もちろん、この梵天勧請の物語は伝説ではあるのですが、しかし、悟りを得るために死ぬ直前まで修行を続けた段階の釈迦はどちらかといえ小乗的ではあつたでしょう。しかし、自ら立ちあがつて初転法輪を行なうことにしたとき、明らかに釈迦は大乗になった。自分一人の救済ではなく、衆生（しゅじょう）の救済を目指したからです。

## 仏教とキリスト教のどこが違うのか

荒 釈迦がどんな困難があろうとも仏教を広めていこうと決意したのは、お釈迦様自身が私たちと同じように、いや私たち以上に悩み、苦しんだ経験があるからに他ならない。

苦米地　そこが神と聖霊との三位一体さんみいつたい※と言われるイエス・

キリストとは違いますね。キリスト教の教えでは、イエスは人間マリアから生まれたけれども、人間ではない。イエスは救い主きういしゅ※であり、人間とは隔絶かくぜつした存在です。だからこそ、十字架の上で殺されても甦よみがえった。釈迦はそんなことはありません。

荒　大乘仏教は、まさにその「釈迦と私たちとは同じ地平線上にいるのだ」ということからスタートしています。後ほど『法華経』のところで説明をするつもりですが、大乘仏教では人間にも「仏はち」になれる可能性があるし、また仏が人間の悩みや苦しみが分かるのは、仏の中にも人間と同じ煩惱ぼんのうがあるからだと解釈をします。

三位一体　キリスト教の根本教義の一つ。創造主としての父である神も、救い主として地上に出現したキリストも、また信仰の中で姿を現わす聖霊である神も、唯一の神が姿を変えて現われたものであって、元来、この三つは一体であるとする考えを指す。

救い主　古代ギリシア語で救い主のことを「クリストス」と言い、そこからイエス・キリスト（ヘブライ語では「メシア」）という呼び名が生まれた。キリストは姓でも名でもない。

苦米地 キリスト教では「人間には神になる可能性がある」とは絶対に考えません。人間がいくら努力をしたところで、自力では「神の国」※に入ることはできない。神の国に入れるかどうかを決めるのは神の特権で、人間は赦しを待つだけの存在です。仏教とキリスト教は、まったく違う人間観を持っています。

## 「来世すらも階級社会」のバラモン教

苦米地 しかし、こうした、いわば「人間中心の思想」、つまりヒューマニズムは釈迦が最初に仏教を説きはじめたときからあったのだと思います。そして、こうした釈迦の教えは

神の国 イエスの教えによれば、最後の審判の後、地上に打ち立てられた「神の国」に、正しい信仰を持った人が神によつて選ばれ、甦るとされる。人間は死んですぐに天国に行くわけではないのである。

当時のインドの宗教界にとっては許しがたいものでした。

現代インドで広く信仰されているヒンドゥー教は、古代の「バラモン教」※と呼ばれる宗教を母体としたものです。そして、このバラモン教もヒンドゥー教とともに強固な身分制度を基礎としています。

現代インドの身分制度を「カースト」※と言うのはご存じでしょう。カーストは一九五〇年に成立したインド憲法において、公式には撤廃されています。しかし、現実には差別の構造はなくなっていない。というよりも、カーストはインド社会そのものであり、カーストがなくなれば、インド社会そのものが解体してしまうという側面も持っているからです。

そして、このカーストの前身とも言えるのが古代バラモン教時代の「バルナ」（四種姓）です。釈迦の時代、インドの社

バラモン教 仏教が起きる以前から、バラモン階級を中心に信仰されていた宗教のこと。「ベーダ」と呼ばれる膨大な文献を聖典として、その教義は複雑多岐にわたる。高度なインド哲学はこのバラモン教を母体にして発展したものである。

カースト インドの社会は、数千もの閉鎖的な人間集団によって構成されていると言われる。この集団のことをカーストと言う。それぞれのカーストには独自の生活習慣やルールがあり、他のカーストとの上下関係が厳しく定まっている。カーストは差別や貧困の温床となつていてとしてイ

会では司祭階級のバラモンが社会の最上級に位置し、以下、王侯・武士階級クシャトリヤ、庶民階級バイシャ、隷属民（れいぞく）シユードラという順序で身分が分けられていました。また、この四種姓にさえ加えてもらえない、「不可触民」※と呼ばれた階級もありました。

これらのバルナは、インドの歴史を反映しています。史上何度も、インドはアフガニスタン地方から入ってくる侵略者によって征服されてきました。征服者は当然、被征服者よりも上位に立ちます。その繰り返しによって、インドの身分制度はできてきたのです。

そして、このカーストの仕組みは来世にも持ち込まれました。つまり、バラモン教においては最上位のバラモン階層だけが聖職者になれ、神と対話ができるのもバラモンだけであるとされました。また、それとは対照的に隷属民シユードラ

インド憲法はカースト制度を認めていない。

不可触民 古代のバルナ制度、現代のカースト制度の外にあつて、「触れただけでも穢れる」と、謂れなき差別を受けてきた人々のことを指す。アチュート、アンタッチャブル、アウトカーストなどさまざまな呼称があるが、彼ら自身は自分たちをダリット（Dalit）と呼ぶ。インドの公式文書などでは「指定カースト」「Scheduled Castes」と言う。

はバラモン教の信者になることすら許されませんでした。

## 「輪廻思想」を産み出したインド哲学

**苦米地** このような階級社会であったインドにおいて釈迦の説いた仏法はきわめて革命的なものでありました。そもそも釈迦自身がバラモン階級の出身ではなく、その下のクシャトリヤでした。さらに弟子の中には舍利弗※のようなバラモン階級もあれば、優波離※のようなシュードラ階級もありました。

また、古代インド社会では女性は男性に比べて圧倒的に虐げられていて、たとえばバラモンの妻であっても、儀礼的にはシュードラとして扱われていました。したがって、女性はバラモン教の儀式に参加することさえ許されなかったのです。

**舍利弗** サンスクリット語の「シャーリプトラ」に漢字を当てたもの。釈迦の十大弟子の一人で、「智慧第一」と称せられた。

**優波離** サンスクリット語「ウパーリ」に漢字を当てたもの。元は釈迦族に仕えた理髪師であったと伝えられる。十大弟子の一人で、「持律第一」（教団のルールを守ることににおいて筆頭）と称せられた。

ところが釈迦は女性に対してもその門戸を開き、出家することと許しています。これはバラモンたちにとつてみれば、社会秩序を破壊するテロ行為にすら見えたことでしょう。

では、いったいなぜ、釈迦はカースト制度を無視するような行動に出たのか。それは釈迦の唱えた教説と大いに関係があります。

みなさんは「輪廻」という言葉をご存じでしょう。人間を含む、ありとあらゆる動物は死んでも魂は残り、別の人間や動物として生まれ変わる。このサイクルが繰り返されるかぎり、苦しみもまた永遠に続くというわけですが、実はこれはバラモン教の世界観なのです。

悟りの教科書

荒了寛 × 芭米地英人 著

発行・集英社インターナショナル 発売・集英社

定価 1,200 円（本体）＋税

ISBN 978-4-7976-7216-9

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)